

僕は後悔していない

あれは、大人の真似として、全く、彼女の気持ちは別として、受け入れられるものではなかった。そう、思ったが、そう、口に出して、彼女の前で認めることは、僕にはできなかった。

どうしたらいいのか、わからなくなった。

やっぱり、彼女に今の様に、これからも会いたい。
ただ、それだけなんだけど。
彼女とは、知り合いでも何でもない。
どの様に、したらいいのか、わからない。

「付き合ってくださいませんか。」

一言、つるりと、僕の口から出た。
「ああ、だめだ」と思っても、それしか、僕には言うことが考えられなかった。

「なぜ、時々、会いたい。」とか、
「今度、山田さんとあなたと、
僕の友達で、グループでどうですか。」
とか、何とか、もっと、ましな事を

僕は言えなかったのか！
彼女は、僕の顔を見て、無言で首を横にふった。

僕は、ただ、そうかと、うなだれるだけだった。
また、しばらく、僕も、彼女も黙っていた。